



沼祐一<赤の少年> 1940年頃 貼絵



久保寺保久園長と山下清



八幡学園 1930年

# 幸福のためのアート

記憶の  
アート  
第4回講座

八幡学園を事例として、  
アートと福祉の  
境界領域を探る

2011 4・24 sun 13:30~16:00

場 所／愛知芸術文化センター12階  
アートスペースE・F (定員60人・要予約)  
会員無料／非会員500円  
申し込み／e-mail: art\_collective8@yahoo.co.jp または、  
fax: 052-882-3173

1930年代の八幡学園は、確かに興味深いね。アートの才能を発揮したのが山下清だけだったら、山下個人の才能ということで話が終わる。けれども沼祐一や石川謙二など、たった30人余りの園児の中から何人もの才能が開花しているのだから、学園の福祉や教育と無関係じゃない。福祉や教育のあり方に注目すべきだよ。でも学園はアーティストを育てようとしたわけじゃない。学園が望んだのは園児たちの幸福だった。幸福の追求が結果としてアートを生み出した、というのが正しいんだ。これは重要なことで、福祉が有名アーティストを育てようなんて考えると、かえって不幸を招くかもしれない。それとアウトサイダー・アートがまるで流行現象のように扱われるのも危ないという気がする。日本は本当に流されやすいからね。しかし、じゃあ、福祉にとってアートがどんな意味をもつかだけど、ここがむずかしいところだ。アートって、やっぱり人間の根本的な欲求だし、福祉にも必要じゃないのかな。障害者本人が「生きている」ということを高らかに表現できるアートは、福祉の空気を変えると僕は思う。そしてアートが福祉から学ぶことも多い。八幡学園を調べて感じたのは、園児たちの絵への没頭は半端じゃなく、努力や工夫も立派だったということ。彼らの絵には無理がなく、情性や妥協がない。名声やお金とは無縁で、10代や20代で死んでしまった園児も多いけど、「あなたたちはよくやったよ」と声をかけたくなる。ある意味、彼らはアーティストの手本だよ。それと、八幡学園は、軍国主義の時代に知的障害児たちの「自治会」を創設したくらい学園だから、いろいろな視点から再検証すべきじゃないかな。この講座への期待ということでは、アートと福祉、それに教育、医療もだけど、異分野間で情報や発想の交換が始まればいいなどと思っている。／三頭谷鷹史(談)

#### ◎八幡学園

久保寺保久(1891~1942)が1928年に創立した知的障害児の養護施設。当時の日本ではこうした施設は少なく、八幡学園は8番目、私財をなげうっての設立であった。貧困問題を重視、そのためか養護費を低く抑え、苦しい経営を続けた。教育理念は「踏むな、育てよ、水そそげ」。貼絵教育によって山下清らが才能を開花。1930年代後半、早大心理学の戸川行男によって早大図書館ホール、大隈講堂、銀座の青樹社画廊などで園児作品の展覧会が開催され、注目を浴びる。その後、山下は放浪生活に入った。(詳しくは三頭谷鷹史著「宿命の画天使たち」美学出版を参照)

#### 講師／三頭谷 鷹史 (みづたに たかし)

1947年愛知県生まれ。同志社大学卒。60年代末から美術、写真、演劇、パフォーマンスなどのジャンル横断的表現活動や批評活動を開始。80年代以降は批評を中心に活動。「美術手帖」展評(81~83年)、「毎日新聞(中部)」(83~95年)、「C&D」(83~85年)、「版画芸術」(86、87年)、「朝日新聞(名古屋)」(92~95年)の美術欄を担当。95年以降、研究活動に専念。著書に「前衛いけはなの時代」(美学出版03年)、「宿命の画天使たち 山下清・沼祐一・他」(美学出版08年)、「美術のゆくえ、美術史の現在」(共著、平凡社99年)など。名古屋造形大学教授。



#### 司会／鈴木 敏春 (すずき としはる)

美術批評家。1951年東京生まれ。~79年「8号室」運営委員会、90年美術雑誌「美術手帖」展評など各誌に執筆。ボードレスアートのライフレギュラー(回想法アート)を提唱。最近の主な企画／2009年「境界なきアート展」豊川市桜ヶ丘ミュージアム、2009年~2010年「小牧アートコミュニティ」独立行政法人福祉医療機構助成事業など。